

キリスト教（徒）は原発とどのよう に向き合うのか ～環境神学の思想と実践から～

宗教は3.11後のエネルギー問題にどう応えるか？

～キリスト教、神道、仏教と環境倫理～

2015.5.8 木村護郎・クリストフ

話の流れ

1. 環境神学とは何か
2. 原子力発電に関する教会関係者の見解
3. 「脱原発」をこえて
4. 節電の実験
5. エコロジーにおいて宗教の果たす役割

1. 環境神学とは何か

はじめに

- ▶ 問い:
日本社会においてキリスト教（徒）の存在はどこに現れているか
⇒(広義の)福祉・教育におけるキリスト者の存在感
⇔環境面での埋没？
- ▶ 「エコロジー」は「社会問題」とちがってとりつくしまがない？
(社会的活動に取り組むキリスト者の、環境問題に関する懇談会での発言)

近代（プロテスタント）神学における自然の喪失

- ▶ 近代自然科学の発達に伴う「自然界」からの神学の撤退
- ▶ 近代神学における(内面的な)救いへの集中

- ▶ 現代神学における反省

「世界(自然)との関連を失った神学はただ人間の内面的な世界、精神の世界のことについてしか発言しえない神学となり、そこで考えられる人間は、具体的な(自然的)生の基盤を持たない抽象的な人間となり、神学は人間の自然的(身体的)生活の具体的な問題については何ら有効で具体的な方向づけをなしえないものとなり、福音の内容は、生の豊かさを喪失した主観的なものになり終わる。」

(森野2012:178)

創造の靈性

(Creation spirituality, Schöpfungsspiritualität)

救済の靈性(Salvation spirituality, Erlösungsspiritualität)に対して

⇒「創造」の観点からの聖書の読みなおし

⇒(とりわけ近代以降)軽視されていた驚くべき豊かな靈的な次元

- ・地球は人間の所有物ではない(創世記…)
- ・世界の神秘性への感受性(詩篇、預言者、イエスのたとえ…)
- ・生態系のつながりと連帯感(創世記、詩篇、パウロの手紙…)
- ・人間の責任と役割(創世記、預言者、福音書…)
- …

「創造の靈性」の環境問題に関する意義と限界

意義:

創造の靈性

- ⇒創造(被造界)とのつながりの回復
- ⇒世界についての感謝と責任の自覚

限界:

罪の結果としての環境問題の認識が希薄?

罪: 神と神の思い・秩序から離れること

人間・社会環境における現れ + 「自然環境」における現れ
#赦されて罪に向き合うことができるのがキリスト教の貢献ではないか?



「タイタニック現実主義」 (ラミス2000)

- ▶タイタニックは「絶対沈まない」とされた
- ▶氷山の警告を他の舟から繰り返し受けていたが、速度をおとさず航海を続けた
- ▶船長は乗客の招きで食事会へ
- ▶氷山の警告に対して、通信士は、「今忙しい」と相手にせず



エコロジー靈性

(Eco-spirituality, Ökospiritualität)

救済中心の靈性

⇔創造(被造界)中心の靈性

⇒「第三の動きとして、キリスト教のエコロジー靈性は、(…)
救済中心の靈性と被造物中心の靈性との統合を目指している。」
(カミングズ1993:215)



神の前にへりくだること (旧約聖書 ヨブ記38-39)

わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。

わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。(…)

誰が隅の親石を置いたのか。そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い、神の子らは皆、喜びの声をあげた。(…)

お前は一生に一度でも朝に命し、曙に役割を指示したことがあるか(…)

天の法則を知り、その支配を地上に及ぼす者はお前か。お前が雨雲に向かって声をあげれば洪水がお前を包むだろうか。お前が送り出そうとすれば、稲妻が「はい」と答えて出て行くだろうか。(…)

お前は馬に力を与え、その首をたてがみで装うことができるか。(…)
鷹が翼を広げて南へ飛ぶのは、お前が分別を与えたからなのか。鷲が舞い上がり、高いところに巣を作るのは、お前が命令したからなのか。(…)



神の前に責任を負うこと

(新約聖書 ルカによる福音書12章)

主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。主人が帰ってきたとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。確かに言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。

しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰ってきて、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。



<超>拡大製造者責任!?

創造と救済のつながり

「わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。/ わたしはあなたたちを造った。/ わたしが担い、背負い、救い出す。」

(イザヤ書46:4, Cf. エレミヤ1章)



神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネによる福音書33:17)



「環境神学」と「エコロジー神学」

- ▶ 内容の共通性と視点の違い(補完的?)
- ▶ 環境神学: 自分の周りに目を向ける姿勢。
- ▶ 俯瞰的にはエコロジー神学。

Cf.感謝と賛美

2. 原子力発電に関する 教会関係者の見解

～ドイツ、韓国、そして日本～

世界教会協議会中央委員会声明

- ▶ 2014年7月2日から8日までスイスのジュネーブで会合を行った世界教会協議会中央委員会は、(…)加盟教会と関連の奉仕団体やネットワークに次のことを呼び掛ける。
- ▶ 個人や共同体の生活様式において変革をもたらす変化を導くために生態学的に敏感な靈性を発展させ実践すること、エネルギーの消費と効率・節約そして再生可能な源からのエネルギーの利用に前向きな変化をもたらすこと(…)
- ▶ 出典:「**核のない世界**に向けた声明」2014年7月7日
(<http://www.christiantoday.co.jp/articles/13683/20140715/wcc-central-committee-statement-towards-a-nuclear-free-world.htm>)

問い: キリスト教界は原子力発電をどのようにとらえてきたか

ドイツから: 「原子力発電に関する北エルベ地域 福音ルター教会会議の声明」(1986年11月29日)

受けとめと問い:

- (2)ほかの人に責任をなすりつけたり、わたしたちのところは安全対策が進んでいるので大丈夫です、などと、この事故を他人事で終わらせてしまってもよいのでしょうか。
- 私たちの、**被造物への責任**(Schöpfungsverantwortung)を考えると、原子力をエネルギー源として使うことをやめるべきではないかということこそが私たちに問われています。

▶ 問題把握:

(4) (…)**キリスト教的人間観によれば、人間は技術の使用に際しても決定的なあやまちをする可能性があるばかりでなく、実際にしてしまうのです。幅広い危険性をはらむ原子力をエネルギー源に用いるばあい、いったんあやまちがおきると、被造物に対してとりかえしのつかない結果をうみかねません。人間が決めてあやまちをしないというものはありえない以上、あやまちを許さない技術を使うことは人間の限界をこえています。罪深い人間があやまちをするものであることを認めるところに、被造物を保つためのキリスト信徒の貢献があります。**

▶ 帰結:

- (6) **方向転換**しようではありませんか。被造物を保全するためには、被造物をなるべく傷つけず、人間の限界をこえないエネルギー供給の仕方を発展させる必要があります。
- (…)
- (11)事故の衝撃がさめた後も、ひとたび認識されたことが忘れられることがあってはなりません。以前とはちがった生き方やエネルギー供給・使用のやり方を精力的かつ継続的に、目に見える形で実現していきましょう。

韓国カトリック司教団『核技術と教会の教え—核発電についての韓国カトリック教会の省察』
2013年10月（日本語訳6月刊行予定）

▶ VIII 核と教会の教え(社会教説)

問い:

「135.核発電を維持し、また、拡大しようとする者たちは、国家が核発電を主導することが、まさに、国家の経済成長のために必要なことであると主張する。そうだとすると、核発電関連産業が、地域間の深刻な不均衡と不義の現実を呼び起こしているとするならば、これは倫理的判断を下す対象となる。両立することのない二つの結果をもたらす事象を選択する問題は、倫理が引き受ける領域である。核発電によってもたらされる成長の経済的利益が、地域と地域、世代と世代間の不均衡と不義を圧倒しているか考えてみなければならない。」

問題把握:

「141.核発電は、生産地と消費地の間、都市の人々と核関連産業で働く労働者たちの間、人間と自然の間、現代と未来を担う世代の間の相互依存のきずなを強めるよりも、「責任回避」と「深刻な不平等」を拡大することによって「構造的な罪」に転換してしまう危険が大きい。」

▶ 帰結:

- ▶ 「158.教会自らが、既に整えられた代替案を実現しなければならない。例をあげれば、教会関連施設に自然エネルギー設備を設置することが考えられるだろう。経済的な負担と制度的制約があるだろうが、エネルギーに関して教会共同体の意識を高め、倫理的にエネルギーを使用し、制度を改善したならば、その実りは経済的な負担よりはるかに価値あるものだと思える。(…)
- ▶ 全国レベルで、地域レベルで、教区レベルで、小教レベルで、家庭レベルで、個人レベルで、エネルギー消費を減らす道と、エネルギー生産のできる道が提起されたならば、教会はそれを受け入れ実現しなければならないのである。

核のない世界のための韓国キリスト者信仰宣言

(2012年3月1日) (『基督教思想』編2012)

- ▶ 放射性廃棄物による地球汚染と生命破壊は創造の秩序の破壊であり神聖への冒瀆罪である
 - ▶ 核とキリスト教信仰は両立することができない
- 「核兵器と原子力発電は権力と暴力の象徴である。(…)このような核で人間は征服と食欲の体制を作り、その体制は地球生命共同体全体を絶滅させる戦争と被曝と汚染の問題を生んだ。このような体制は、キリスト教と両立できない。」(339)
- ▶ キリスト者の行動綱領
 - 一. 私たちは、核が与える幻想と誘惑、そして核に対する私たちの食欲と執着から脱却する覚醒がこの時代の信仰的課題であることを認識する。
 - 六. 私たちは韓国の市民社会が原子力と決別し、再生可能な自然エネルギーを通じた共助の生活を送ることができるよう「脱原発エネルギー転換運動」の先頭に立って行く。

日本のキリスト教界における

「3.11」以前のいくつかの例 (組織的な動きのみ)

- ▶ 1970年 日本YWCA全国総会「『核』否定の思想に立つ」
- ▶ 1987年1月23日
「日本国政府の核政策」に対する日本基督教団声明
- ▶ 2008年11月14日
我が国の原子力行政を憂慮し、「無核・無兵」社会を目指すことを求める声明(日本バプテスト連盟)

「3.11」後の例：いまずぐ原発の廃止を ～福島第1原発事故という悲劇的な災害を前にして～ (2011年11月8日) 日本カトリック司教団

- ▶ 原発はこれまで「平和利用」の名のもとにエネルギーを社会に供給してきましたが、その一方でプルトニウムをはじめとする放射性廃棄物を多量に排出してきました。わたしたちはこれらの危険な廃棄物の保管責任を後の世代に半永久的に負わせることとなります。これは倫理的な問題として考えなければなりません。(…)
- ▶ 確かに、現代の生活には電気エネルギーを欠かすことはできません。しかし大切なことは、電気エネルギーに過度に依存した生活を改め、わたしたちの生活全般の在り方を転換していくことなのです。

▶ 類似例：日本基督教団、日本聖公会…

3. 「脱原発」をこえて

第1-2-11表 自然エネルギー等の長所と短所

	長所	短所
太陽光	・クリーン ・無尽蔵 ・各家庭にも設置可能	・広大な面積が必要(土地の利用で他と競合) ・天候に左右される ・夜間は使用不可
地熱	・燃料費不要 ・高稼働率 ・安定	・設置場所が限られる ・適地調査に高費用
風力	・クリーン ・燃料費不要	・信頼性・耐久性 ・景観に影響 ・騒音
バイオマス	・クリーン ・生産しながら利用できる ・光合成による生産性は極めて高い	・食料などの用途と競合 ・水や化学肥料を必要とする ・土壌の生産性持続 ・長期的な環境への影響
燃料電池	・騒音・振動・大気汚染など公害の心配がない ・必要箇所に設置でき送配電ロスが低減できる	・電池自体のコスト ・信頼性 ・寿命

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200001/hpaa200001_2_012.html

▶ Cf. 石井彰2014

エネルギーの副作用① 「自然」への影響

- ▶ 「人間が支払うエネルギー予算は自然に対するわれわれの暴力行為の物差しである」
- ▶ 「より高いエネルギー消費は(…)大きな暴力に対応する」
- ▶ 「電力の割合の高いエネルギーシステムは(…)高い初期エネルギー投入を課せられている。核エネルギーによるエネルギーシステムとは必ず電力の割合の高いエネルギーシステムである。したがって(…)核エネルギーの投入はエネルギー消費の減少と、したがって人間以外の被造物に対する暴力と相対峙する。」(リートケ1996:310)

エネルギーの副作用② 「社会」への影響

- ▶ 「たとえ汚染しないエネルギーをえることが可能で、それが豊富にあったとしても、大量にエネルギーを使用することは、肉体的には無害でも精神的には人を奴隷化する麻薬に似た作用を社会/に及ぼすのである。」
- ▶ 「社会が崩壊の脅威にさらされるのは、燃料の不足によるのではなく、また有効エネルギーの浪費や汚染を招く使用法や不合理な使用法によるのでもなくて、大部分の人間を必然的に墮落させ、略奪し、欲求不満に陥らせるほどのエネルギー量を産業が社会に詰めこもうとすることによるのである。」
- ▶ 「国民にとって道具のエネルギーを過度に取り入れることは、食物の熱量を過度に摂取するのと同じく危険だとも言えるが、国民がエネルギーに溺れていることを自覚することは、健康に有害な食生活を自覚することよりもはるかに難しい。」(イリイチ1979:16-18)

日本における電力消費量の増加

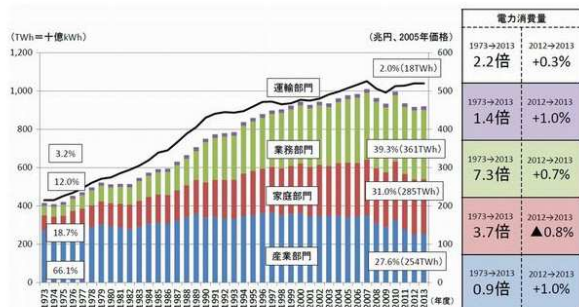
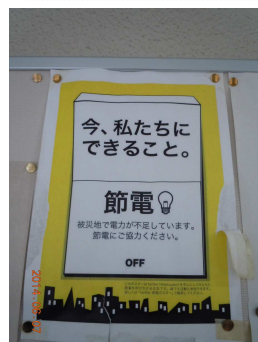


図2 過去40年間の電力消費量の推移。出典：資源エネルギー庁

▶ <http://www.itmedia.co.jp/smartjapan/articles/1503/02/news031.htm>

電力が「不足」しているから節電するのか？



- ▶ 「首都圏では屋間の鉄道の運転本数を減らして節電したが、それで大した不自由は感じられなかった。エネルギーは過剰消費だったのである。まさに「供給自ら需要を創る」に依拠する新古典経済学の行き着いた先が3・11だったのである。結局、セーの法則とは「過剰な供給が過剰な需要を創る」である。」(水野2012:372)
- ▶ 「3・11はエネルギーの過剰な「蒐集」によって起きた事故だといえよう。」(同:373)

⇒ 過剰であるため、節電する！

▶ Cf. エネルギーはいつも「不足」する(イリイチ)

4. 節電の実験

これは何の一覧でしょう？

- ▶ 電気ストーブ、電気カーペット、暖房便座
- ▶ ドライヤー
- ▶ 電動ひげそり
- ▶ 炊飯器
- ▶ テレビ
- ▶ 電話ファックス複合機
- ▶ インターホン
- ▶ 壁時計、目覚まし時計
- ▶ 生ごみ処理機

- ▶ 電気掃除機

▶ 87

3Cのある／ない生活の功

- ▶ クーラーなし
汗のかける子ども、日本で生きていける子ども
- ▶ (カラー)テレビなし
本に夢中になれる子ども
- ▶ カーなし
基礎体力のある子ども

(タクシー、レンタカー)

▶ 88



太陽光発電
(2012.3-)

5. エコロジーにおける宗教の役割

個人や集団（組織）による変革の意義

「私には何もできない、私が自分を変えたところで何も変わらない、という意見をよく聞く。」(Linz 2012:90)

「しかし、個人や集団は、一歩ずつ先に足を踏み出す役割を果たすことができる。そのような行動は確かにそれだけでは不十分であるが、不可欠でもある。先駆者としての可能性、すなわちそれらの人々の洞察と行動する用意があるということが、社会が変わるためのもっとも重要な前提となる出発点であろう。」(91)

⇒(とりわけ)日本のキリスト者に与えられた役割

▶

この世の旅における「気づき」のプロセス

- ▶ 「気にとめる道」(Weg der Achtsamkeit, Anselm Grün)の一環としての電力・エネルギー
- ▶ 今日ご紹介した考え方や実践も、未完のプロセス

Lu (2007)
The Crisis of Faith and the Ecological Crisis

環境問題の一因としての、
西洋における「究極の関心」の減退

- ▶ “In my opinion, the lost of westerners’ Ultimate Concern is the deepest cultural cause of the ecological crisis facing mankind today.”(80)
- ▶ “If people don’t spend their time and energy for spiritual transcendence, they will spend them to satisfy their greed.”(81)
- ▶ “For only when they forget the Ultimate Concern can they strive with all their time and energy towards economic growth and scientific and technological development.”(82)

▶ 93

Pursuit of the common good.
Religious institutions may mobilize
public opinion and action

SCIENCE, 19 SEPTEMBER 2014 • VOL 345 ISSUE 6203 p.1457
Partha Dasgupta & Veerabhadran Ramanathan

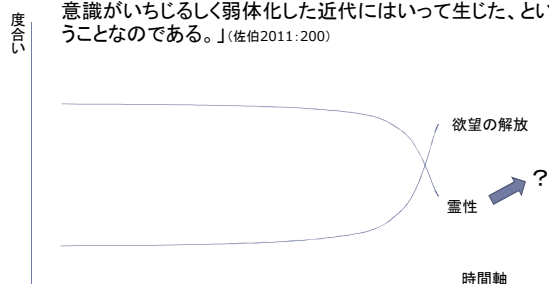
環境・開発問題に関して宗教界の果たせる役割

“Finding ways to develop a sustainable relationship with nature requires not only engagement of scientists and political leaders, but also moral leadership that religious institutions are in a position to offer.”

- ▶ 「私のテーゼは、無制限な物質的経済成長は、われわれが情動的[霊的]に実り豊かな生活関係へと心を開くことが出来るならば、それだけでブレーキをかけることが出来るというものである。」(Müller 1987、安田治夫訳)

超越的次元への意識（霊性）の減退と環境問題

「大事なことは、欲望や富の無限拡張は、まさしく「原罪」の意識がいちじるしく弱体化した近代にはいつて生じた、ということなのである。」(佐伯2011:200)



▶ 96

図:木村2014

ご清聴ありがとうございました。

Das Energieprojekt der Abtei Münsterschwarzach



▶ <http://www.solar-abtei.de/>

参考文献

- G.アルトナー他(安田治夫訳)「自然との和解の声明—環境危機における教会の責務」『福音と世界』1987年9月号
- 石井彰(2014)『木材・石炭・シェールガス』PHP新書
- イヴァン・イリッチ(1979)(大久保直幹訳)『エネルギーと公正』晶文社
- チャールズ・カミングズ(1993)(木鎌安雄訳)『エコロジーと霊性』聖母文庫
- 木田敏一・荒井敏編(1996)『聖書の思想と現代』(現代聖書講座第3巻)日本基督教団出版局[樋口進「創造と自然」、井上大衛「新約聖書における自然と歴史」]
- 木村護郎クリストフ(2011)「被造物への責任からドイツの教会は原子力とどのように向きあってきたのか」新教出版社編集部編『原発とキリスト教』新教出版社、136-148
- (2012a)「英語と原発—日本における普及過程、問題構造および対策の共通性—」『社会言語学』第12号、49-66
- (2012b)「キリスト教と原発—ドイツの事例から—」『地球システム・倫理学会会報』第7号、113-118
- (2013)「なぜエネルギー問題が信仰(者)の課題となるのか—チェルノブイリ後のドイツとフランス後の日本—」『キリスト教と文化』第11号(環境問題から見た東日本大震災の意味とキリスト教の役割—「環境神学」の構築をめざして)、関東学院大学キリスト教と文化研究所、13-19
- 『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来—韓国キリスト教の視点から—』かんよう出版 2012、329-345
- R.シュベーマン(山脇直司・辻麻衣子訳)(2012)『原子力時代の驕り—「後は野となれ山となれ」でメルトダウン』知泉書館
- 佐伯啓恵(2011)「現代「文明」の宿命」『文明の宿命』NTT出版

- Dasgupta, Partha & Veerabhadran Ramanathan (2014): Pursuit of the common good. Religious institutions may mobilize public opinion and action, SCIENCE, VOL 345 ISSUE 6203, p.1457
- 藤村靖之(2006)『エコライフ&スローライフのための楽しい非電化』洋泉社
- M. マクルーハン(栗原裕・河本仲聖訳)(1987)『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房
- 水野和夫(2012)「近代」の終焉』3.11と私 東日本大震災で考えたこと』藤原書店、371-374
- Müller, A.M. Klaus [ミュラー](1987): Das unbekannte Land; Konflikt-Fall Natur; Erfahrungen und Visionen im Horizont der offenen Zeit, Stuttgart: Radius Verlag
- 森野善右衛門(2012)『原子力と人間—3・11後を教会はどう生きるか』キリスト新聞社
- ダグラス・ラミス(2000)『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』平凡社
- G. リートケ(1996[1993])「被造物が立ち帰るまで」富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』新教出版社、305-324
- Liedke, Gerhard [リートケ](2009): Auch die Schöpfung wird befreit werden, in: Heinrich Bedford-Strohm (Hg.): Und Gott sah, dass es gut war. Schöpfung und Endlichkeit im Zeitalter der Klimakatastrophe, Neukirchner Verlag, 34-40
- Linz, Manfred [リンツ](2012): Weder Mangel noch Übermaß. Warum Suffizienz unentbehrlich ist, München: Oekom
- Lu, Feng (2007): The Crisis of Faith and the Ecological Crisis『環境思想・教育研究』創刊号、77-87